

【原著論文】

ホームヘルパーの専門職アイデンティティと ネグレクト支援との関連

—構造方程式モデリングを用いて—

広瀬美千代*

Relationship between “home helper’s professional identity” and
“home helper’s neglect support” – using structure equation modeling

Michiyo Hirose

要 旨

目的 本研究では、「ホームヘルパーが家族介護者による不適切な介護に対して働きかける支援」を「ホームヘルパーのネグレクト支援」と定義し、その構造を確認し、それに関連する要因として、ホームヘルパーの専門職としてのアイデンティティから検討することを目的とした。

方法 A 県内の訪問介護事業所から無作為抽出した 600 名を対象とする自記式郵送調査を行った。有効回収数は 149 通、有効回収率は 24.8% となった。ホームヘルパーの専門職アイデンティティが家族介護者の介護におけるネグレクトに対する支援を規定するといった因果関係モデルを構築し、構造方程式モデリングを用いてデータに対する適合度を確認した。

結果 欠損値のない 101 人のデータを用いて、「ホームヘルパーのネグレクト支援」に対して確証的因子分析を実施した結果、統計学的水準を満たしていた。本尺度は 1 因子で構成され、構成概念妥当性が支持された。また、「ホームヘルパーのネグレクト支援」は、「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」($\beta=0.279, p<0.01$)、「管理職の経験」($\beta=0.293, p<0.01$)と有意な関連が見られた。

結論 本尺度はホームヘルパーのネグレクトに対する支援を測定する尺度として構成概念妥当性と信頼性を有している。結果から、専門職としてのアイデンティティが高い者あるいは管理職の経験がある者は、生活面において、直接的な介護を通して様々な問題に気づき、家族介護者によるネグレクトに対して対処できると予測される。

Abstract

The support through which a home helper looks after a patient when family caregivers provide inappropriate care to the patient is defined as home helpers’ neglect support. This study aims to develop a scale for measuring home helpers’ neglect support and to examine the relation between the scale and home helpers’ professional identity.

Method: A self-administered mailed survey was conducted among 600 home helpers who worked at home-

受付日 2017. 9. 20 / 受理日 2018. 1. 17

*関西福祉科学大学 社会福祉学部 准教授

help service stations in A prefecture. The response rate was 24.8%. This analysis adopted only the dates of 101 home helpers. The relation between home helpers' professional identity and home helpers' neglect support was examined as a causal model by using structure equation modeling.

Result: The results indicated the following: 1) the construct validity of the current scale was confirmed by a confirmatory factor analysis and consisted of one factor, and 2) home helpers' neglect support was significantly associated with home helpers' professional identity and their experiences in managerial positions.

Discussion: As a scale to measure home helpers' neglect support, this scale has construct validity and sufficient reliability. In conclusion, those with a strong professional identity or managerial experience are expected (1) to be aware of various problems that can arise while providing direct care in their daily lives and (2) to cope with neglect by family caregivers.

● ● ○ **Key words** ホームヘルパー home helper/ネグレクト neglect/アイデンティティ identity/管理職 managerial position/構造方程式モデリング structure equation modeling

I. 研究背景と目的

我が国では要介護高齢者が急増し、それと共に、家族による在宅介護¹⁾に関して様々な問題が取り上げられてきた。その中でも介護虐待や高齢者虐待などの社会問題がより大きな課題となっている。市区町村における高齢者虐待防止への体制整備状況における調査²⁾では、市町村からみた困難な例において、過半数を占めていたのが、「虐待の認識のない養護者（家族介護者）への対応」であった。

また、家庭内における高齢者虐待に関する調査の概要³⁾では、介護の相談相手の有無に関しては、相談相手はいるが実際の協力はない者が38.6%、相談も協力もない者の割合が17.7%であった。このようなことから、家族介護者による介護やその生活について、在宅で直接相談に乗れる専門職の存在が求められるといえる。

一方、在宅介護を支援する専門職であるホームヘルパー（訪問介護員）は、在宅における訪問系のサービス提供者の中で最も利用されている専門職⁴⁾であり、利用者やその家族と接触する頻度も高い。ホームヘルパーは、要介護者や要支援者の家事援助や生活介護が主な業務であるが、ホームヘルパーには利用者・家族との信頼関係形成のための心理的な支援者としての側面も必要⁵⁾である。保良⁶⁾はホームヘルパーは、介護知識や福祉制度などのほか、「人生の悩み」や「不

安」、「生きがい」などの問題について利用者や家族から相談されることがあると報告している。

このようなことからホームヘルパーは家族介護者の相談に乗り、介護の苦労やストレスを軽減するという役割もあることが予測される。さらにこのことは、家族介護者と信頼関係を構築し、適切なコミュニケーションをとっているならば、在宅介護において起こり得る、介護の質の低下や介護放棄などに対しても、発見すればその対処として家族介護者に何らかの示唆をすることも可能であると考えられる。しかしながら、ホームヘルパーの支援や業務に関する先行研究においては、サービスの有効性⁷⁾⁸⁾に関するもの、アセスメント⁹⁾や個別ケア¹⁰⁾など実践度に関する尺度開発¹¹⁾は見られるが、虐待や介護放棄などの支援に関する量的研究はほとんどされておらず、高齢者虐待は事例による研究¹²⁾が多い。

一方、全国自治体へのアンケート調査を実施した結果、虐待に対する具体的な支援を講じている自治体は2割と少なく、赤司¹³⁾は、介護福祉領域に係わる専門職をはじめとする第三者の観察と支援が重要な鍵となると述べている。

在宅介護における家族による虐待を未然に防ぐ方策として、三浦¹⁴⁾は医療・福祉専門職のチームケアによって、ホームヘルパーが中心となって働きかける家族調整技術による機能について述べている。本研究においても、ホームヘルパーによるこのような機能に着目

し、ホームヘルパーが家族によるネグレクトなどを事前に察知して防いでいく支援が求められると考える。本研究ではこの家族介護者による介護放棄やホームヘルパーから見て利用者の QOL の低下や尊厳を重視した介護が損なわれていると見受けられる不適切な介護に焦点をあて、どのようなホームヘルパーがそのような介護を行っている家族に対して適切な連携や支援ができるのかについて検討したいと考える。

他方、ホームヘルパーにネグレクトを予見し、うまく家族に働きかけたり、場合によっては他の専門職に連絡・連携をすることが可能となるには、ある程度の熟練や高い専門性が必要であると推測される。高齢者虐待事例の援助過程の質が援助結果に及ぼす影響を検討した小林¹⁵⁾は、虐待状況の変化を評価し、虐待事例の援助においては援助過程の質が保たれていれば、結果の改善を導いたり、さらに深刻な事態を回避することができる」と報告している。このことから本研究では、専門職としての高い自負をもって業務を遂行できる自覚があるような、アイデンティティが高いホームヘルパーは家族によるネグレクトに対して適切な支援ができるのではないかと予測をたてた。

よって本研究では、「ホームヘルパーが家族介護者による不適切な介護に対して働きかける支援」を「ホームヘルパーのネグレクト支援」とし、その構造を確認し、それに関連する要因として、ホームヘルパーの専門職としてのアイデンティティから検討することとする。

II. 方法

1. 調査対象および調査方法

調査対象者は、A 県内の訪問介護事業所に勤務するホームヘルパーとした。WAM-NET に 2013 年 4 月時点で掲載されていた情報を基に、A 県内の全訪問介護事業所から 300 か所を無作為抽出し、各事業所に 2 通ずつ計 600 通の調査票を配付した。調査票は無記名自記式とし、記入後は回答者が自ら返信用封筒に厳封した後、研究責任者宛に返送する方法を採った。調査期間は、2013 年 5 月 1 日から同月 31 日までで、有効回収数 149 通、有効回収率は 24.8% となった。

2. 調査内容

(1) 測定尺度の概念・定義

調査項目の選定にあたり、「ホームヘルパーのネグレクト支援」については、介護支援専門員や社会福祉士による段階を踏んだ援助過程という側面より、ホームヘルパーが日常生活の支援をする中で利用者・家族と接する場面における援助関係構築過程という側面を強調している。副田¹⁶⁾の「高齢者虐待サイン」などは 40 項目もの項目で構成されており、これらの項目別のチェックリストはすでに作成されている。このため、本尺度は普段の支援で気付くことに焦点を当てていることから、身体や心理的側面に特化した項目ではなく、家族介護者による介護において、全体的に見て、できていないあるいは、不十分である側面に着目し、ネグレクトと言う用語を用いた。従って、家族介護者の負担やストレスを軽減するといった機能も、絶え間なく業務に追われるホームヘルパーができることには限界があると考えられることから、家族の利用者への介護態度や介護の仕方に限定をして、ホームヘルパーが記録を残している、上司に伝える、家族に伝える、できているか尋ねるという至ってシンプルな実践を想定した。また、「高齢者虐待サイン」¹⁶⁾には、虐待をしている家族介護者は「福祉や保健の専門家に会うことを嫌がる」という項目がある。このことに関して、ホームヘルパーが実際にネグレクトを疑う際に直接に家族介護者に尋ねるという行為は、家族介護者にとって自身の介護を意識しているまたはしていないにかかわらず、客観的に見て良くないという評価を受けていることが伝わる行為であるため、虐待予防に何らかの効果があるといえる。

以上のことから本研究では、「ホームヘルパーのネグレクト支援」を「家族の利用者への介護態度や介護の仕方に関してホームヘルパーができるネグレクトの予防的な支援」への意味合いとした。このようにして、得られた質問項目は「家族の利用者への介護態度や介護の仕方などで家族ができていないと感じることを記録している」「家族の利用者への介護態度や介護の仕方などで家族ができていないと感じることを上司に伝えている」「家族の利用者への介護態度や介護の仕方などで家族ができていないと感じることはなるべくしてもらおうように家族に伝えている」「家族に対し

てヘルパー不在時のオムツ交換や水分補給などができているかそれとなく尋ねている」の4項目で構成した。

次に、ホームヘルパーのアイデンティティに関しては、広瀬¹⁷⁾によって開発された「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」尺度を用いることとした。本尺度は、「ホームヘルパーが利用者との関係の中で築いていく過程で形成される理想の専門職としての独自の存在意義や利用者から認められるという自覚」と定義されており、その概念を測定するために開発されたものである。

また、この尺度開発にあたり、ホームヘルパーのアイデンティティを構成する概念を抽出するため、ホームヘルパー7名にインタビュー調査を実施している。得られたテーマから、「利用者からこんなことに気づく人」と言われ、「医療という訪問看護の切口ではなく、利用者・家族の生活している部分から入ることで利用者により近い存在となる」など他専門職との違いを自負したい気持ちが強調されている。このようなことから、ホームヘルパー自身が考える専門職としてのアイデンティティに関する質問項目は、「ヘルパーは家事手伝いの仕事とは違うということを利用者や家族に示したいと思っている」「ヘルパーは家族に対して上からではなく、同じ目線で家族を支えていると思う」など計7項目で構成されている。これらを下位概念とする1因子モデルは、構造方程式モデリングを用いた確認的因子分析により、構成概念妥当性が支持されている¹⁷⁾。

回答は、両尺度とも「とてもそう思う：4点」「まあそう思う：3点」「あまりそう思わない：2点」「まったくそう思わない1点」の4件法で求め、「ネグレクト支援」や「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」が高いほど得点が高くなるように設定した。

(2) その他の調査内容

ホームヘルパーの属性及び特性として、性別、年齢、所持資格、経験年数、管理職の経験の有無を測定した。ここでいう管理職は、組織のリーダーやサービス提供責任者、および主任クラスの者の中間管理職以上を指している。所持資格は2013年5月の時点で適用されている資格を尋ねた。経験年数はホームヘルパーとしての経験を年数で尋ねた。また、調査項目の妥当性に関しては、高齢者福祉分野の研究者およびサー

ビス提供責任者によるエキスパートレビューを受け、必要に応じて修正を行ったため、少なくとも内容妥当性があると考ええる。

3. 解析方法

第一段階として、統計解析は、まず「ホームヘルパーのネグレクト支援」を構成する因子を検討するため、探索的因子分析 (Promax 回転) を行った。なお、探索的因子分析にはカテゴリカルデータに最適な推定法である重みづけ最小二乗法の拡張である Weighted Least Square parameter estimates using a diagonal weight matrix with robust standard errors and mean-and variance-adjusted chi-square test statistic (以下、WLSMV とする) を用いた。また探索的因子分析による因子数は、Kaiser-Guttman 基準ならびに固有値の減衰状況などにより判断した。

第二段階として、潜在変数とする「ホームヘルパーのネグレクト支援」因子の構成概念妥当性を検証するため、1因子モデルを設定し WLSMV を推定方法とする構造方程式モデリング¹⁸⁾を用いた確認的因子分析¹⁹⁾を行い、データに対する適合度を検討した。

また「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」の構成概念妥当性については、先行研究に従い1因子モデルを設定し、WLSMV をパラメータの推定法に、構造方程式モデリングを用いて確認的因子分析を行った。なお、構造方程式モデリングで検証された因子構造を構成する観測変数を測定尺度とみなした場合の信頼性は、Cronbach の α 信頼性係数で検討した。

第三段階の「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」と「ホームヘルパーのネグレクト支援」の関係については、介護職員の専門職アイデンティティが仕事の継続意思に関連するといった堀田らの研究²⁰⁾を参考に、困難の「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」を独立変数、「ホームヘルパーのネグレクト支援」を従属変数とした因果関係モデルを構築した。さらに、ホームヘルパーの性別 (男性：0点、女性：1点)、年齢、経験年数、管理職の経験の有無を統制変数として投入し、WLSMV を推定法に構造方程式モデリングを用いて、モデルの適合度と各変数間の関係性を検討した。

上記の構造方程式モデリングにおけるモデル適合度の評価には、 χ^2 値 (以下、 χ^2 とする)、自由度 (以下、

dfとする)、Comparative Fit Index (以下、CFI)、Root Mean Square Error of Approximation (以下、RMSEA)を用いた。 χ^2 をdfで除した値(以下、 χ^2/df)は小さいほどモデルのデータに対する適合度が高いことを示し、CFIは一般的には0.950以上であればそのモデルがデータをよく説明していると判断される²¹⁾。またRMSEAは、0.100以上であればそのモデルを採択すべきでないといわれる²²⁾。また、パス係数の有意性は5%有意水準とした。

以上の解析には、統計ソフト「IBM SPSS 23.0 for Windows」ならびに「Mplus version 7.4」を用いた。

4. 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、調査対象者に対して調査の趣旨、調査協力への自由意志(任意)の保障、匿名性の保持、研究目的以外でデータを使用しないこと等について明記し、同意を得られた場合は無記名で返送を依頼した。また、本研究は大阪市立大学の倫理委員会に申請し、2013年3月12日に審査・承認を受けて実施した(承認番号12-41)。

Ⅲ. 結果

統計解析には、回収された149人(回収率24.8%)の調査票のうち、ネグレクトへの支援を経験したことがあると答え、かつ当該項目に欠損値のない101人(調査対象者の24.8%、回答者の67.8%)のデータを用いた。

1. 分析対象者の属性

分析対象者であるホームヘルパー101人の性別は、

男性が14人(13.9%)、女性が87人(86.1%)であり、年齢は平均46.1歳(標準偏差:10.6、範囲:21-65)であった。所持資格については約半数の者が介護福祉士を所持し、ヘルパーの経験年数は平均6.1年(標準偏差:3.91、範囲:0-16)で、3年未満が3割以上を占めていた。また、サービス提供責任者などの管理職の経験がある者の割合は49.5%であった。

2. 「ホームヘルパーのネグレクト支援」の回答分布および妥当性と信頼性の検討

「ホームヘルパーのネグレクト支援」に関する回答分布は表1に示すとおりであった。「家族の利用者への介護態度や介護の仕方などで、家族ができていないと感じることを上司に伝えている」に「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した者が89人(88.1%)と最も多く、実践の程度で最も少なかったのは「家族の利用者への介護態度や介護の仕方などで、家族ができていないと感じることを記録している」に「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」と回答した者で、44人(43.5%)であった。

次に「ホームヘルパーのネグレクト支援」の因子構造を検討するため、アイテムプールした4項目を用いて探索的因子分析を行った。またPromax回転後の因子パターン行列を確認し、因子負荷量が0.4以上を採用した結果、「ホームヘルパーのネグレクト支援」は1因子構造が妥当であると判断した(表2)。

さらに探索的因子分析により抽出された「ホームヘルパーのネグレクト支援」の4項目による1因子モデルを設定し、構造方程式モデリングを用いて構成概念妥当性について検討した。その結果、モデルのデータに対する適合度は $\chi^2(df)=3.079(2)$ 、CFI=0.997、RMSEA=0.073と統計学的な許容水準を満たしてい

表1 「ホームヘルパーのネグレクト支援」に関する回答分布

n=101

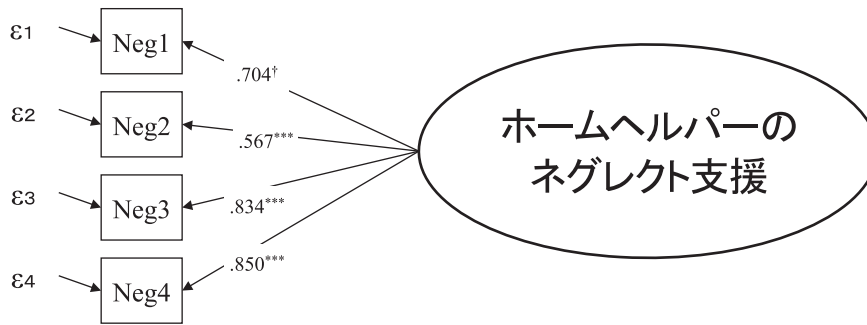
項目	とても そう思う	まあ そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
Neg 1 家族の利用者への介護態度や介護の仕方などで、家族ができていないと感じることを記録している	16 (15.8)	41 (40.6)	37 (36.6)	7 (6.9)
Neg 2 家族の利用者への介護態度や介護の仕方などで、家族ができていないと感じることを上司に伝えている	31 (30.7)	58 (57.4)	12 (11.9)	0 (0.0)
Neg 3 家族の利用者への介護態度や介護の仕方などで、家族ができていないと感じることはなるべくしてもらるように家族に伝えている	9 (8.9)	51 (50.5)	35 (34.7)	6 (5.9)
Neg 4 家族に対して、ヘルパー不在時のオムツ交換や水分補給などができているかそれとなく尋ねている	12 (11.9)	60 (59.4)	24 (23.8)	5 (5.0)

※%は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計が100%とならないことがある

表2 「ホームヘルパーのネグレクト支援」探索的因子分析結果

n = 101

項目	因子負荷量
Neg 1 家族の利用者への介護態度や介護の仕方などで、家族ができていないと感じることを記録している	0.672
Neg 2 家族の利用者への介護態度や介護の仕方などで、家族ができていないと感じることを上司に伝えている	0.488
Neg 3 家族の利用者への介護態度や介護の仕方などで、家族ができていないと感じることはなるべくしてもらえように家族に伝えている	0.754
Neg 4 家族に対して、ヘルパー不在時のオムツ交換や水分補給などができているかそれとなく尋ねている	0.777
固有値	3.999
因子寄与率 (%)	46.54



n=101 : χ^2 (df) = 3.079 (2), CFI=0.997, RMSEA= 0.073 (推定法 ; WLSMV)

※ ε_iは誤差変数 ※†はモデル識別のために制約を加えた箇所である ※***: p<0.001

図1 「ホームヘルパーのネグレクト支援」の因子構造モデル (標準化解)

た。また、当4項目による「ホームヘルパーのネグレクト支援」を測定尺度とみなした場合の α 信頼性係数は 0.766 であった。(図1)

3. 「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」の回答分布および妥当性と信頼性の検討

「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」に関する回答分布は表3に示すとおりであった。「ヘルパーは利用者との関わりの中で、様々な気づきを通して提案できる人と思う」と回答したものが 95 人 (94.1

%) と最も多く、次いで「ヘルパーは家事手伝いの仕事とは違うということを利用者や家族に示したいと思っている」が 93 人 (92.0%) であった。

次に「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」を 1 因子として 7 項目による 1 因子モデルを設定し、構造方程式モデリングを用いて構成概念妥当性について検討した。その結果、モデルのデータに対する適合度は χ^2 (df) = 38.661 (14)、CFI=0.960、RMSEA=0.132 と統計学的な許容水準を満たしていなかった。そこで、Mplus が算出する修正指標を参考に「ヘルパーは

表3 「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」に関する回答分布

n = 101

項目	とても そう思う	まあ そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」				
Id1 ヘルパーは家事手伝いの仕事とは違うということを利用者や家族に示したいと思っている。	56 (55.4)	37 (36.6)	7 (6.9)	1 (1.0)
Id2 ヘルパーは家族に対して上からではなく、同じ目線で家族を支えていると思う。	46 (45.5)	46 (45.5)	8 (7.9)	1 (1.0)
Id3 ヘルパーはケアマネジャーや看護師に見えにくい支援をしていると思う。	55 (54.5)	37 (36.6)	7 (6.9)	2 (2.0)
Id4 ヘルパーは利用者からは味方として見られていると思う。	21 (20.8)	59 (58.4)	21 (20.8)	0 (0.0)
Id5 ヘルパーは利用者との関わりの中で、様々な気づきを通して提案できる人と思う。	34 (33.7)	61 (60.4)	6 (5.9)	0 (0.0)
Id6 ヘルパーは利用者にとってはなくてはならない存在だと思う。	36 (35.6)	54 (53.5)	11 (10.9)	0 (0.0)
Id7 ヘルパーは利用者や家族にとって身近に何でも相談できる人であると思う。	27 (26.5)	52 (51.5)	22 (21.8)	0 (0.0)

家事手伝いの仕事とは違うということを利用者や家族に示したいと思っている」と「ヘルパーはケアマネジャーや看護師に見えにくい支援をしていると思う」の誤差間に共分散を認めて再度分析したところ、 $\chi^2(df) = 15.321 (13)$, CFI=0.996, RMSEA=0.042 と統計学的な許容水準を満たしていた。また、当4項目による「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」を測定尺度とみなした場合の α 信頼性係数は 0.817 であった。

4. 「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」と「ホームヘルパーのネグレクト支援」の関係 (図2)

「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」が「ホームヘルパーのネグレクト支援」を規定するとした因果関係モデルのデータに対する適合度は、図2のとおり $\chi^2(df) = 126.467 (78)$, CFI=0.936, RMSEA=0.078 と統計学的な許容水準を満たしていた。パスの推定値およびその有意性検定の結果、「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」は「ホームヘルパーのネグレクト支援 ($\beta = 0.279, p < 0.01$)」と有意な関係を示していた。また統制変数との間では、管理職が「ホームヘルパーのネグレクト支援 ($\beta = 0.293, p < 0.01$)」に有意な関連を示すことが確認された。

なお各潜在変数 (内省変数) に対する説明率は、「ホームヘルパーのネグレクト支援」が 27.0%、「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」が 7.3% であった。

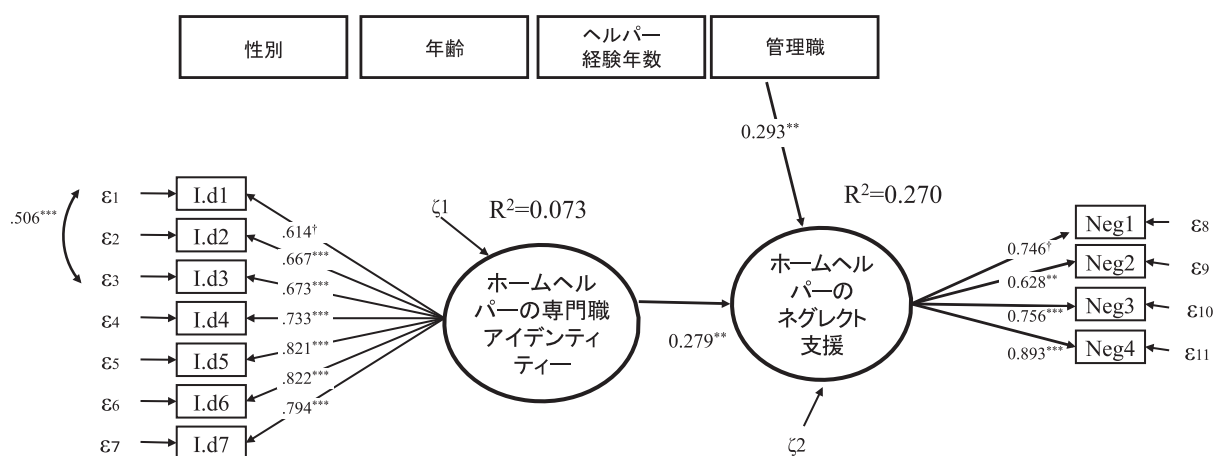
IV. 考察

1. 「ホームヘルパーのネグレクト支援」の妥当性と信頼性

本研究では、在宅で要介護状態にある高齢者を支援するホームヘルパーが家族介護者による不適切な介護に対して働きかける支援である「ホームヘルパーのネグレクト支援」を測定する尺度の因子構造を検討した。回答分布から、本研究の対象者のほとんどの者が肯定的な回答をしていた。特に、「家族の利用者への介護態度や介護の仕方などで、家族ができていないと感じることを上司に伝えている」においては、約9割の者が肯定的に捉えていたことから、ホームヘルパーは家族介護者の行う介護に対して、自ら家族介護者に伝えるか否かを自分で判断できないとしても、上司にその判断を仰ぐことを実施していることがわかる。また約6割の者は何らかの形で家族介護者に介護の仕方などについて気になる事があればそれを伝えて、それ以上介護の質が低下しないように働きかけていることがうかがえる。

また、この概念に対して1因子モデルを設定し、構造方程式モデリングを用いて確証的因子分析を実施した結果、統計学的な水準を満たしていたことより、構成概念妥当性が支持された。また、信頼性を示すCronbachの α 係数からも内的整合性(信頼性)を有していると判断した。

よって本尺度は、「ホームヘルパーが家族介護者による不適切な介護に対して働きかける支援」と定義さ



$n=101$: $\chi^2(df) = 126.467 (78)$, CFI=0.936, RMSEA=0.078 (推定法; WLSMV)

※ ϵ , ζ は誤差変数 ※ η はモデル識別のために制約を加えた箇所である ※***: $p < 0.001$, **: $p < 0.01$
統制変数からのパスは有意なもののみ示した

図2 ホームヘルパーの専門職アイデンティティとネグレクト支援の関係 (標準化解)

れた「ホームヘルパーのネグレクト支援」を測定する尺度として構成概念妥当性と信頼性を有しているといえる。

2. 「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」と「ホームヘルパーのネグレクト支援」の関係

本研究で「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」と「ホームヘルパーのネグレクト支援」の関係を検討した結果、有意な関連がみられた。

先行研究において、ホームヘルパーの専門職アイデンティティは困難状況にうまく対応していく中で培われる自覚であると報告されている¹⁷⁾が、このような様々な気づきを通して家族や利用者に提案できる者は、家族介護者による介護の質の低下やネグレクトなどの困難状況においても、適切な支援が行えることが予測できる。

ホームヘルパーの業務は非常に個性が高く¹⁰⁾、西浦²³⁾は、業務の達成すべき水準があいまいで利用者に奉仕する、またはお手伝いさん扱いされることが多く、生活援助部分における専門職としてのアイデンティティ構築が困難であると指摘している。一方、近接領域である看護師に関する専門職のアイデンティティは専門技術や知識、その実践における自負が概念構成の中心となっていることが先行研究で示唆されている²⁴⁾。けれども、本研究におけるホームヘルパーのアイデンティティを測定する尺度は、業務における高い専門性を重視するという側面より、訪問看護師や介護支援専門員とは違う支援ができるというアイデンティティの斉一性を重視している尺度である。このため、生活面において直接的な介護をしないと発見できないような支援ができることにその専門性を見出すことができる。このようなアイデンティティが高いホームヘルパーは、決められた業務だけをこなすのではなく、家族介護者によるネグレクトを回避することも視野に入れることを可能とし、介護者への対話や他専門職への連携などの対処することができるといえる。

3. 「ホームヘルパーのネグレクト支援」に関連する要因

統制変数と「ホームヘルパーのネグレクト支援」の間では、性別や年齢、ヘルパーとしての経験年数は関連がみられず、管理職の経験が有意な関連を示すこと

が確認された。ここでいう管理職とは、組織のリーダーやサービス提供責任者、および主任クラスの者の中間管理職以上を指している。これらの役職を経験した者はケアチーム内あるいはホームヘルパーの事業所内で指導者や責任者としての役割を担っている者である。本研究対象者であるホームヘルパーは、その業務が利用者への家事援助や身体介護という範囲だけでなく、家族介護者への介護指導や助言という役割を認識し、具体的な実践につなげることができていたと解釈できる。

サービス提供責任者であるホームヘルパーは、訪問介護計画の作成を通して訪問介護を調整する役割とホームヘルパーへの技術指導などを行う中間管理職的な二つの役割を担っている²⁵⁾。このような役割の加重など、サービス提供責任者には様々なストレスが課せられることが予想される²⁶⁾²⁷⁾。須加はサービス提供責任者の業務におけるストレスの要因の分析を行ったが、その中に「家族との関係」は要因にはあげられておらず、利用者との関係やケアマネジャー、職場での関係が精神的健康やうつ傾向と関連があったと報告している。ホームヘルパーには、家族に対する介護指導が業務としてあげられているが、サービス提供責任者として家族との関係は困難ではないと推測される。一方、鳥海²⁸⁾はサービス提供責任者の役割構造を検討し、「家庭内虐待の発見」や「利用者と家族の関係を把握」という質問項目をあげている。サービス提供責任者にはヘルパー指導機能²⁹⁾があるため、ヘルパーの育成をするうえで、家族介護者への介護指導という枠組みでネグレクト回避の支援も実施していることが予測される。

このような状況の中で、本研究の管理職を経験したホームヘルパーは利用者だけでなく家族介護者による介護にも目を向け、利用者のためにできていない部分があると、何らかの対処を取ろうととし、在宅介護全体を見渡して包括的に支援することができるのではないかと考える。

そして、ホームヘルパーとしての経験年数と「ホームヘルパーのネグレクト支援」の間に関連がなかったことは、家族介護者のネグレクトに対して持つホームヘルパーの使命感や価値観などは、職業経験の積み重ねだけでは獲得することができないが、ある種の責任者としての管理職である者が持つ専門性が備わった結

果、ネグレクトを単に発見するだけでなく、それを予防する行為に発展したと考えられる。

V. 結論

本研究では、「ホームヘルパーのネグレクト支援」を「ホームヘルパーが家族介護者による不適切な介護に対して働きかける支援」と定義し、それを測定する尺度として構成概念妥当性と信頼性を有していることが明らかになった。さらに、「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」や管理職の経験が「ホームヘルパーのネグレクト支援」に関連していることが明らかになったといえる。

本研究で使用している「ネグレクト支援」の概念は、直に虐待そのものへの対処を意味しているのではなく、意識的または無意識に関わらず、家族介護者の介護の評価を行い、不十分であることがあれば、見過ごすのではなく、ある種の専門職としての責任を持って対応できることを表す概念である。このように日常的な支援過程で起こり得る事態に対処できることは、ホームヘルパーに求められる専門性において必要な支援であるといえる。

本研究は横断的調査であるため、関連要因との間に因果関係があるとはいえない。よって、今後は縦断的研究によって「ホームヘルパーのネグレクト支援」は、どのような職場環境やスーパービジョンに関連するのかなどの要因分析を行う必要があるといえる。

謝辞

本調査の実施に至り、ご協力いただいた A 県訪問介護事業所の訪問介護員の皆さま、及び各施設長の皆さまにこの場をお借りして感謝申し上げます。また、本研究の調査実施に対してご協力をいただきました大阪市立大学、岡田進一先生、清水由香先生に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 内閣府 平成 28 年版高齢社会白書 (全体版) http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/zenbun/s1_1_1.html (参照日/2017-9-4)
- 2) 市町村、都道府県における高齢者虐待への対応と養護者支援について、平成 18 年 4 月、厚生労働省老健局 <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/08/dl/s0801-3k.pdf> (参照日/2017-9-4)
- 3) 市区町村における高齢者虐待防止の標準化のための体制整備状況の関連要因および支援のあり方の検討 <https://www.ihep.jp/publications/report/search.php?dl=1&i=1> (参照日/2017-9-4)
- 4) 厚生労働省、平成 26 年介護サービス施設・事業所調査の概況 http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service14/dl/kekka-gaiyou_02.pdf (参照日/2017-9-4)
- 5) 広瀬美千代「ホームヘルパーと利用者、家族との心理的支援関係を構成する要素—その意識と会話に焦点をあてて—」『関西女子短期大学紀要』24、2015 年、11-25 頁。
- 6) 保良昌徳「ホームヘルパーの業務分析と介護福祉業務」『沖縄国際大学社会文化研究』3(1)、2000 年、1-30 頁。
- 7) 後藤真澄、若松利昭「ホームヘルプサービスの有効性に関する研究：利用者満足度とホームヘルパーの自己評価の比較から」『社会福祉学』41(2)、2001 年、49-58 頁。
- 8) 小澤温「援助事例からみたホームヘルプサービスの有効性と課題」『病院・地域精神医学』43(2)、2000 年、148-149 頁。
- 9) 笠原幸子「ケアワーカーが把握する高齢者の情報の構造に関する探索的研究：介護老人福祉施設での量的調査をもとに」『大阪市立大学生活科学研究誌』2007 年、Vol.6、185-200 頁。
- 10) 広瀬美千代、杉山京「ホームヘルパーの主體的で柔軟性のある個別ケア」を測定する尺度の構造」『メンタルヘルスの社会学』日本精神保健社会学会、21、2015 年、13-22 頁。
- 11) 須加光明「ホームヘルパーの援助力を測る尺度の開発」『老年社会科学』33(4)、2012 年、566-574 頁。
- 12) 谷口好美、高崎絹子「水野敏子ほか老人虐待と支援に関する研究：家族的背景からみた虐待の特徴」『日本老年看護学会誌』journal of Japan Academy of Gerontological Nursing, 1996 年 1(1)、29-41 頁。
- 13) 赤司秀明「介護家族による高齢者虐待とその防止策に関する研究：心の健康問題から取組む有効性を探る予備調査より」『介護福祉学』7(1)、2000 年、55-63 頁。
- 14) 三浦美子「高齢者在宅介護における家族の介護意識に関する研究：高齢者虐待予防の視点から」『保健福祉学研究』6、2008 年、185-200 頁。
- 15) 小林亜由美、高崎絹子、千葉由美「在宅における老人虐待事例の援助の分析：援助過程の質、および援助結果に影響を与える要因の検討」『日本老年看護学会』5(1)、2000 年、78-87 頁。
- 16) 副田あけみ『在宅介護支援センターのケアマネジメント』中央法規、1997 年。
- 17) 広瀬美千代、杉山京、清水由香、岡田進一「ホームヘルパーの専門職アイデンティティの構造とその関連要因—楽観的な態度からの検討」『老年社会科学』vol.39(4)、2018 年、403-413 頁。

- 18) 豊田秀樹『共分散構造分析 [入門編]』朝倉書店、1998年、東京。
- 19) Muthen LK, Muthen BO: Mplus User's Guide Fifth Edition. Los Angeles, Muthen and Muthen, 2007.
- 20) 堀田和司、奥野純子、戸村成男ほか「介護職員の「仕事の継続意志」に及ぼす要因 職務満足感と専門職アイデンティティとの関連」『プライマリ・ケア』32巻1号、2000年、9-16頁。
- 21) Hu L, Bender P “Cutoff Criteria for Fit Indexes in Covariance Structure Analysis” Conventional Criteria versus New Alternative. Structure Equation Modeling. 1999; 6: 1-55.
- 22) 山本嘉一郎、小野寺孝義編「Amosによる共分散構造分析と解析事例」ナカニシヤ出版、1999年、16-17頁、京都。
- 23) 西浦功「生活支援サービスにおける「専門性」のゆくえ」『札幌大谷大学社会学部論集』3)、2015年、71-94頁。
- 24) 佐々木真紀子、針生亨「看護師の職業的アイデンティティ尺度 (PISN) の開発」『日本看護科学会誌』26(1)、2006年、34-41頁。
- 25) 鳥海直美「ホームヘルプサービスにおけるコーディネーターの役割葛藤の構造：サービス提供責任者の役割実践に焦点をあてて」『生活科学研究誌』4、2005年、213-221頁。
- 26) 須加美明「訪問介護のサービス提供責任者のストレス尺度の開発」『老年社会科学』32(1)、2010年、14-22頁。
- 27) 須加美明「訪問介護のサービス提供責任者の業務におけるストレス要因の分析」『介護福祉学』14(2)、2007年、143-150頁。
- 28) 鳥海直美「ホームヘルプサービスにおけるコーディネーターの役割構造：サービス提供責任者の実践に焦点をあてて」『生活科学研究誌』3、2005年、237-246頁。
- 29) 須加美明「訪問介護におけるサービス提供責任者の調整業務の評価尺度の開発：モニタリング機能とヘルパー指導機能の評価を中心として」『老年社会科学』34(3)、2012年、325-334頁。